

# 薬都とやまと北海道の繋がり

札幌市医師会

はっとり ゆういち  
服部 裕一

縁があつて、当時の富山医科薬科大学、現在の富山大学医学部に赴任し、15年近くを富山で過ごさせていただいた。着任するまで富山は行ったこともない見ず知らずの土地であったが、富山といえば、「くすりの富山」のイメージを持たれ、「薬都」とも呼ばれていることから、薬理学を専攻する立場からは魅力的な赴任先であった。

「くすりの富山」の歴史は古く、「越中富山の薬売り」で知られる伝統的産業「配置薬」は元禄年間に始まり、JR富山駅前には当時の売薬さんをイメージしたモニュメントがある。この歴史は、二代目富山藩主の前田正甫公が、江戸城で腹痛を訴えた福島藩主の、反魂丹を分け与え、その有効性に周りの多くの藩主たちが驚いたという有名なエピソードに始まる。売薬が生まれた背景には、富山の厳しい自然環境があり、富山藩は、加賀藩の支藩として成立したものの、神通川に沿う縦長の稲作には不利な領地だったため、領民は農閑期に外に出て商売をする必要に迫られ、そのため登場したのが売薬だったという。幕末には4,500人が売薬に従事していた記録が残されている。現在の富山県には、特長ある製薬企業が数多く存在して、新薬より価格の安い後発医薬品の生産が盛んなため、医療費削減の流れが追い風となり、全国を上回るペースで生産が増えて、都道府県別医薬品生産額こそ第5位（2021年）であったが、人口1人あたりの医薬品生産金額、製造所数、製造所従業員数は全国第1位である。

北海道と富山県とは古くから深い繋がりがある。昆布の産地は羅臼、利尻などに代表される北海道であるが、消費量では富山県が際立って多く、数年前までは不動の全国1位だった。昆布がほとんど採れない富山県で、なぜ食されているのか。それは江戸時代、富山県域が昆布をはじめとする海産物を運んだ北前船の寄港地を多く擁していたことに端を発する。当時の越中国には、富山藩領の岩瀬、本家・加賀藩領の放生津や伏木といった港が北前船の寄港地として賑わっていた。北海道の松前から昆布やニシンなどを積んだ北前船が寄港して荷を下ろし、越中国からは米を中心に、酒、醤油、薬などが積み込まれた。その大きな担い手だったのが越中の廻船問屋で、そこには富山の薬売りが深く関与していて、薬業で財を成し北前船の船主になった例は珍しくないという。彼らによって昆布は大坂に運ばれただけでなく、そのルートは九州まで延び、琉球王朝にまで及んだ。昆布が全く採れない沖縄に、昆布を使った郷土料理があるのはこの理由による。

富山では、富山湾で獲れる新鮮な海の幸の刺し身も昆布締にして食される。昆布で締めることで魚の身が熟成し旨味が増すうえに、魚の生臭さも消え、風味が豊かになる。昆布巻き蒲鉾も、ほかの地では見られない富山の味だったし、一番驚いたのは、海苔ではなくとろろ昆布を巻いたおにぎりが、コンビニで富山県民の定番として売られていたことだった。

蝦夷から様々な海産物が船で越中地方に運ばれていた経緯から、越中から北海道に移り住んだ人がたくさんいた。その後蝦夷から北海道に名前が変わると日本各地から屯田兵が入植したが、このタイミングで北海道と交流があった富山県も入植するための団体移住を奨励した。そのためにこの時期に富山県から多くの移住者が北海道に入植したが、記録のある1882年から1935年までの間に約25万人と都府県で5位であるものの、1902～1906年と1907～1911年は1位で、明治後期に急増している。集団移住は、現在の小平町や苫前町など道北地方が中心で、その後は、帯広市や幕別町など道東地区への移住が多くなっている。

北陸銀行は、富山市に本店を置く地方銀行である。北海道内には、北陸銀行の支店が16店舗、出張所が2店舗ある。道外の地方銀行で、道内にこれほどの店舗数を持つのは、北陸銀行だけであろう。北陸銀行の前身である十二銀行が初めて北海道に進出したのは、1899年に小樽支店開設のときで、国策銀行である旧北海道拓殖銀行ができる約半年前のことだった。北海道開拓の時代、北陸3県から北海道への移住は盛んに行われていたので、十二銀行は、北陸の米穀商や海運業者をはじめ開拓地で事業を始めた移住者への支援のために、北海道に進出したとされる。2004年に、北陸銀行と、北海道銀行は、地域広域統合して、富山市に本社を置く金融持株会社ほくほくフィナンシャルグループとなった。地方銀行同士の合併や経営の統合は数多くあるが、本店の所在地が遠隔地に在る統合は国内では初であり、「飛地統合」という銀行再編の新たな形として注目されている。

富山大学に在職中は、北海道大学と札幌医科大学出身あるいは教職として在籍していた富山大学医学部・附属病院の教授陣が集まって、年2回、市内の料亭で、「鮎の会」「河豚の会」と称して、親睦を深め、信頼関係を築く機会を設けてきた。コロナ禍でしばらく休止していたが、この4月に非常勤講師として富山に講義に行った際に、現職のメンバーの先生方がいつもの料亭に集まってくれて、大いに歓談して盛り上がった。あいにく、鮎には早すぎ、河豚には遅すぎたが、富山湾の幸を堪能することができた。北海道と富山との古くからの深い繋がりを鑑みたとき、これからも、北海道大学、札幌医科大学そして旭川医科大学から、優れた人材を富山大学に輩出し、医学部・附属病院のリードオフマンとして大いに活躍していただければ幸いである。